



女子副将・齋藤亜紗子の演技



最後のインカレで演技する高木一憲



藤江昌嗣部長



松尾覚監督



高木一憲主将と八木恵実香女子主将



第38回 体操部

Heroes of the Meiji.
紫紺の勇者たち

—明大体育会の系譜—

文・撮影／菊地武顕
写真提供／明大スポーツ新聞部

創意工夫した練習を重ね
男女ともに目標は1部定着

体操部に入学した新入生は、ミーティングで真っ先にこう叩き込まれる。

「君たちは明治大学の学生です。そのうえで体操部の部員です。そのうえで体操選手なんです」
就任12年目になる松尾覚監督が説明する。

「体操選手である前に明大体操部員であり、その前に明大生であるという『立場』を徹底的に浸透させるためです。授業には必ず出席し4年間で卒業する、怪我などで競技を続けられなくなっても退部せず、部員として部の活動や運営に貢献するなどの『約束』を交わしています」

大正10年の創部時点においても、体操だけをよばよという考えではなかった。部の精神として「体操競技を通じて技術、精神の向上を目指し、共同生活の利点を生かし人格の完成を目的とする」と掲げていた。戦争拡大のため昭和6年に一時解散したが、12年に復活。16年には藤原義章が新人戦で個人優勝したうえ、第1回東西対抗戦に東軍代表として

出場し優勝。翌年の満州国建国10周年慶祝東亜大会には、日本代表として出場した。藤原は後に長く日本体操協会副会長を務め、体操ニッポンを支えた。

床運動での黄金時代

18年に再び解散し、23年から活動再開。30年には、全日本学生選手権大会で団体3位に入った。これが部史上最良の成績である。当時、床運動の特殊種目であるタンプリングは明治の独壇場。村山鉄次郎(旧姓・森谷)が全日本と全日本学生で6度制覇したほか、笹川一、川俣吉男も優勝した。

しかし昭和40年代になると、体操に力を注ぎだした各大学の後塵を拝するようになる。44年の全日本学生選手権9位を最高に、1部と2部を行き来することに。

そんな中、平成8年に塚原直也が入部した。五輪金メダリストの父と五輪代表の母を持つ英才で、入学し

年から5年連続で全日本体操選手権優勝を果たし、オリンピックに3度出場。アテネ五輪では日本の団体優勝に貢献した。ただし体操部に所属してはいたものの、練習は小学生から続けてきた体操クラブで行うという変則的な形式だった。

学生スポーツの基本に戻る

部員が大学とクラブとに分かれて練習する時期があったわけだが、全員が同じ場所で一緒に練習することが学生スポーツの基本であるという考えから、今はこうした所属形式は認めていない。体操部として全員が一つどころで練習する意義を、松尾監督はこう語る。

「体操には、どうしても怪我がつきものです。そのため練習では、恐怖心から挑戦するのを躊躇しがちな技もありますが、仲間が横にいてくれれば頑張れる。また採点競技ですから、他の人に見てもらうことも大切なんです。そういう意味で、部の仲間と共に練習を行うことはとても重要です」

実は体操部の練習環境は、必ずしも恵まれているとは言いがたい。和泉キャンパスの体育館サブホー

ルを、他の部と併用しているのだ。そのため手狭で、床運動では正方形のスペースを確保できず、直線的なコースを行き来するしかない。また、ピットと呼ばれる安全設備も持っていない。

逆境をはね返す創意工夫

こうした環境について説明を受けたうえで納得して入学した選手たちが、創意工夫して練習に励んでいる。なお新体操は二関亜由美、塚松さやか、山本千尋らを輩出したが、最近では活発に勧誘を行っているわけではない。

近年は、女子部も健闘するようになってきた。岡部紗季子(現コーチ)が平成19年、21年と2回連続でユニバーシアードに出場。19年からは男子同様に団体戦にも出場するようになった。

器械体操は、男女ともに全日本学生選手権2部の中堅校。「ピットの少ない学校としては、日本のトップですよ」と、松尾監督は苦笑しつつ選手への健闘を称える。しかしそこに甘んじるわけにはいかない。目標は、1部定着である。

(文中敬称略)